

「次の文章を読み、後の問いに答えなさい。」

二〇二一年四月、盛岡の県立高校に通う伊智花は三年生に進級した。津波による大きな被害をもたらした東日本大震災からひと月が過ぎていた。美術部員の伊智花は、この半年間、昨年他界した祖母が愛した「不動の滝」をモデルにした絵の制作に没頭している。伊智花は大好きだった祖母に捧げるような気持ちで滝の絵を描き、コンクールでの最優秀賞獲得を目指している。

四月末、新学期がようやく始まった。制服の学年章を三年生のものに付け替えて、新しい教室に足を踏み入れた。新しいクラスのうち、ふたりが欠席していた。実家が沿岸で、片付けなどの手伝いをしていてと担任は言った。私は美術室に通う毎日を再開した。美術部は幽霊部員がほとんどで、コンクール四ヵ月前の部室でキャンバスに向かう部員は私だけだ。木の匂いと、すこしだけニスの匂いがある美術室にいと、気持ちが研ぎ澄まされていくのがわかった。使い古されたイーゼルを立てて、両腕をいっぱい伸ばしてキャンバスを置く。私は改めて、集大成の滝を描こうと思った。不動の滝の写真を携帯に表示して、じっと眺めて、閉じる。大きく息を吸って、アタリの線を描き始める。自分のからだのなかに一本の太い滝を流すような、絵のなかの音を描きだすような、豪快で、繊細な不動の滝で、必ず賞を獲りたい。獲る。描きたすほどに、今までの中でいちばん立体的な滝になっていく。

七月のある日、顧問のみかちゃんが一枚のプリントを持ってきた。

「やる気、ある？」

みかちゃんは、懇願のような謝罪のような何とも複雑な表情をしていた。そのプリントには（絵画で被災地に届けよう、絆のメッセージ）「がんばろう岩手」と書いてある。

「これは」

「教育委員会がらみの連盟のほうでそういう取り組みがあるみたいで、高校生や中学生の油絵描く子たちに声かけてるんだって。伊智花、中学の時に賞獲ってるでしょう。その時審査員だった連盟の人が、伊智花に名指しでぜひ描かないかって

学校に連絡があつて」

「はあ」

「県民会館で飾って貰えるらしいし、画集にして被災地にも送るんだって」

「被災地に、絵を？」

「そう」

「絆って、なんなんですかね。テレビもそればかりじゃないですか」

「支え合うってこと、っていうか」

「本当に大変な思いをした人に、ちょっと電気が止まったくらいなのわたしが『応援』なんて、なにをすればいいのかわかんないですよ」

「そうだね、むずかしい。でも絵を描ける伊智花だからこそ、絵の力を信じている伊智花だからこそできることもあるんじゃないか、って、わたしは思ったりもするのよ」

「じゃあ、何を描けば」

「鳥とか、空とか、花とか、心が安らぐような、夢を抱けるような、希望や絆があつて前向きなもの、って、連盟の人は言ってた」

「……描いた方がいいですか」

「描いた方が、いろいろと、いいと思う、かな」

それから私は不動の滝の絵を描きながら、（心が安らぐような、夢を抱けるような、希望や絆があつて前向きなもの）のことを考えた。虹や、双葉が芽吹くようなものは、いくらなんでも「希望つぼすぎる」と思つてやめた。そもそも、内陸でほとんど被害を受けていない私が何を描くのもとても失礼な気がした。考えて、考えて、結局締切りぎりぎりになって、通学の道中にあるニセアカシアの白い花が降る絵を描いた。その大樹のニセアカシアは、毎年本当に雪のように降る。あまりの花の多さに、花が降るたびに顔をあげてしまう。顔をあげるから前向きな絵、と思つたが、花が散るのは不謹慎だろうか、と描きながら思つて、まぶしい光の線を描き足し、タイトルを「顔をあげて」とした。みかちゃんは「これは、すごいわ」

と言ってその絵を出展した。私の絵は集められた絵画の作品集の表紙になった。その作品集が被災地に届けられ、県民会館で作品展が開かれるようになったら新聞社が学校まで取材に来た。

「（顔をあげて）このタイトルに込めた思いはなんですか？」

と、若い女性の記者はまぶしい笑顔で言う。あ。絵じゃないんだ。と思った。枝葉のディテールや、影の描き方や、見上げるような構図のことじゃないんだ。時間がない中で、結構頑張^{がんば}って描いたのにな。取材に緊張^{きんちよう}してこわばるからだから、力がすいと抜^ぬけていく感覚がした。この人たちは、絵ではなくて、被災地に向けてメッセージを届けようとする高校生によろこんでいるんだ。そう思ったら胃の底がぐつと低くなって、からだにずっしりとした重力がかかっているような気がしてきた。記者はますます走り書きができるようにペンを構えて、期待を湛^{たた}えてこちらを見ている。

「申し訳ない、というきもちです。わたしはすこしライフラインが止まっただけで、たくさんものを失った人に対して、絆^{きずな}なんて、がんばろうなんて、言えないです」

記者は「ンなるほど、」⁴と言ってから、しばらくペンを親指の腹と人差し指の腹でくたくたくに触^{さわ}り、それから表紙の絵を掲^{かか}げるようにして見て、言った。

「うーん。でも、この絵を見ると元気が湧^わいてきて、明るい気持ちになって、頑張ろうって思えると思うんですよ。この絵を見た人にどんな思いを届けたいですか？」

「そういうふうに、思ってもらえたら、うれしいですけど」

私は、早く終わってほしい、と、そればかり考えていた。描かなければよかったと、そう思った。そのあと、沿岸での思い出はあるか、将来は画家になりたいのかどうかなど聞かれて、私はそのほとんどを「いえ、とくに」⁵と答えた。そばにいたみかちゃんは手元のファイルに目線を落として、私のほうを見ようとしなかった。記者が来週までには掲載^{けいざい}されますので、と言いながら帰って行って、私は、みかちゃんとふたりになった。深く息を吐^はき、吸い、「描かなければよかったです」と、まさに言おうとしたそのとき、

「このさ、見上げるような構図。木のとっぺんから地面まで平等に、花が降っているところがすごい迫力^{はつりよく}なんだよね。光の線も、やりすぎじゃないのにちゃんと光として見える、控^{ひか}えめなのに力強くてさ。伊智花の絵はすごいよ。すごい」

と、みかちゃんはしみじみ言った。

「そう、なんですよ。がんばりました」

と答えて、それが涙声^{なみだこゑ}になってるのが分かって、お手洗いへ駆け込んで泣いた。⁶悔しいよりも、うれしいが来た。私はこの絵を見た人に、そう言われたかったのだ。

それからの一カ月間、私は不動の滝の絵を力いっぱい描いた。同級生や親戚^{しんせき}から「新聞見たよ」と連絡が来て、そのたびに私は滝の絵に没頭した。

（この絵を見て元気が湧いたり、明るい気持ちになって、頑張ろうって思ってもらえたらうれしいです。と、加藤伊智花（いちか）さん（盛岡大鵬高等学校三年）は笑顔を見せた。）

と、その記事には書かれていた。ニセアカシアの絵のことを考えるとからだも頭も重くなるから、私は滝の絵に没頭した。光をはらんだ水しぶきに筆を重ねることに、それはほとぼしる怒^{いか}りであるような心地^{こころち}がした。流れる。流れる。念じるように水の動きを描き加える。⁷この心につかえる黒い霧^もをすべて押し流すように、真っ白な光を、水を、描き足した。亡^なくなった祖母のことや賞のことは、もはや頭になかった。私は気持ちを真っ白に塗^ぬりなおすように、絵の前に向かった。描き終えて、キャンバスの前に仁王^{におう}立ちする。深緑の森を真っ二つに割るように、強く美しい不動の滝が、目の前に現れていた。滝だった。私が今までに描いたすべての絵の中でいちばん力強い絵だった。「怒濤^{どとう}」と名付けて、出展した。

高校生活最後のコンクールは昨年の優秀賞よりもワンランク下がって、優良賞だった。私よりもどう見ても画力のある他校の一年生の描いた校舎の窓の絵や、着実に技術を伸ばした同学年の猫^{ねこ}の絵が、上位に食い込んでいた。最優秀賞は、私と同じ岩手県の沿岸、大船渡市の女子生徒のものだった。ごみごみとしてどす黒いがれきの下で、⁸双葉が朝露^{あさつゆ}を湛^{たた}えて芽吹く絵⁹だった。あまりにも作^さ為^い的^{てき}で、写^さ実^じ的^{てき}とは言いにくいモチーフだった。色使いも、陰影^{いんえい}と角材の黒の塗り分けが曖昧^{あいまい}で、朝露^{あさつゆ}の水滴^{すゐてき}の光り方もかなり不自然^{ふぜんぜん}。これが最優秀賞。そんなの可笑^{おか}しいだろうと思った。

無冠の絵となってしまうものの、私は滝の絵をとても気に入っていた。返却された絵を改めて美術室に運び入れ、イーゼルの上にのせる。水面に向かって茂っている深緑色の木々。その間を分かつような白い滝。目を閉じれば音が聞こえてくるような水しぶき。その絵の上流から下流まで目で三度なぞり、二歩下がってもう一度眺めた。いい絵だ、と思った。どうしてこれがあの絵に負けてしまったのか、本当はまだ納得がいかなかった。

お手洗いやから戻ると、下校確認の巡回をしていた世界史の、たしか榊という名の教師がノックもせず美術室に入ってきて、私の絵を見た。

「CGみてえな絵だな、これ、リアリティがよ。部員が描いたのか？」

私は自分の絵だというのが気恥ずかしくて「そうみたいです」と答えた。

「立派な絵だよな。ちょっと、今このご時世で水がドーンと押し寄せてきて、おまけにタイトルが『怒濤』ってのは、ちょっときつすぎるけど、俺は意外とこういう絵がすきなんだよ」

榊はキャンバスの下につけていたキャプシヨンの紙の「怒濤」という文字を、人差し指でちろちろちろと弄んでから、イオッシー！早く帰れよな、と言って、次の見回りへ行った。

榊が出て行ったあと、私はしばらくこの絵に近づくことができなかった。五歩くらい離れた場所から絵を覗んでは、さつき榊が言っていた言葉を何度も頭の中で繰り返した。右足が自然に浮いて、地面について、それを繰り返す。大きな貧乏ゆすりをしている自分がいた。何度も足をあげ、おろす、あげ、おろす。指定靴のスニーカーの底の白いゴムが床につくたびに、きよ、きよ、きよ、と間抜けな音がした。なるほどね。だから、だから私の滝の絵は賞を獲れなかったってことね。私から私が剥がれていく感覚がした。あーあ、そういうことだった。だった。はい。なるほどね。なるほど、なの？黙ってニセアカシアの絵を描けばよかったんだろうか。心が安らぐような、夢を抱けるような、希望や絆があつて前向きなもの。鳥や、花や、空を、描けば。

「この絵を見て元気が湧いたり、明るい気持ちになって、頑張ろうって思ってもらえたらうれしいです」

と、小さく声を出して言う。言つて、左足を下げて、助走をつけて絵に向かって走る。迫力のある滝のしぶきに私が近づいていく。蹴とばそう、と思った。こんなもの、こんなもの！私は思い切り右足を後ろに振り上げて、その反動を使って勢いよく蹴った。いや、蹴ろうとした。「んらー！」と、声が出た。しかし私は絵を蹴ることができなかった。咄嗟的にをずらし、イーゼルの蹴った。蹴り上げられたイーゼルの左の脚が動いてバランスが崩れ、キャンバスの滝がぐらりと大きく揺れた。私は倒れ込もうとする滝へ駆け寄った。両手でキャンバスの両端を支えて持ち上げると、イーゼルだけが鋭い音を響かせて床へ倒れた。

吹奏楽部の金管楽器が、ぼほおー、と、さつきから同じ音ばかりを出している。それがそういう練習だと知っていても、間抜けなものだった。夕方の美術室にひとりきり、私は私の滝を抱きしめていた。

(くどうれいん『氷柱の声』)

問一 —— 線部I「懇願のような謝罪のような何とも複雑な表情」とあるが、どのような気持ちが表われたものか。次の中から最も適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 連盟からの依頼なので引き受けてほしいと思いつつも、震災のことを忘れようとしている伊智花につらい思いをさせることになるので申し訳なく思う気持ち。

イ 伊智花が嫌がることは分かっている、無理強いするのは申し訳ないと思いつつも、連盟からの依頼で断るのが難しく何とか引き受けてもらいたいという気持ち。

ウ 被災地の人たちに向けて絵を描くことは難しく、伊智花を苦しめることになると思いつつも、だからこそ伊智花以外にはできないし、頼めないという気持ち。

エ 伊智花の気持ちを思うと頼みにくいが、連盟からの話でもあり、伊智花がより広い視野で絵に取り組めるようになるためにもぜひ引き受けてほしいという気持ち。

問二——線部2「絆って、なんなんですかね。テレビもそれはっかりじゃないですか」とあるが、この発言には伊智花のどのような思いが表われているか。次の中から最も適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 被災した人たちのつらさや悲しみなど実際にはよく分かるはずもないのに、世間の人々が「絆」というきれいな言葉を軽々しく用いて被災者に寄りそった気になっていることに不満を持っている。

イ 自分と同じようにそれほど被害を受けていない人々でも、被災者の悲しみをしっかりと理解して被災地を応援しているのに、自分は被災者との間に「絆」を感じる事ができずにあせりを感じている。

ウ テレビやマスコミが現在「絆」という言葉をひんぱんに用いて何かを訴えているが、正直今まで余り使ったことなかった「絆」という単語が言葉としてどういう意味を持つのか分からず困惑している。

エ 被災地の人たちが実際に困っていて何を必要としているのか分かっていない世間の人々が、「絆」という言葉を用いて、まとはずれな支援をしてかえって迷惑をかけていることに怒りを覚えている。

問三——線部3「結局締切りぎりになって」とあるが、伊智花が順調に絵を描き進められなかったのはなぜか。その理由として、最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 絵を届けることが被災地の人々の気持ちを励ますことになるとは思えず、絵の力を信じられない自分に良い絵を描くことなどできないと諦めていたから。

イ 被災地に届けるにはどのような絵が良いのか見当がつかなかったうえに、何を題材にして描いたとしても不謹慎だと言われそうな気がして不安だったから。

ウ 絵を描きたくても描けない状況にある人もいるのに、被災地へのメッセージなどといって絵を描くように言ってくる無神経な大人たちが許せなかったから。

エ 被災地に送る絵として何を描くべきか分からなかったし、ほとんど被害のない自分が被災者のために絵を描くことが後ろめたくて気が乗らなかったから。

問四——線部4「しばらくペンを親指の腹と人差し指の腹でくくに触り」とあるが、この時の記者の思いはどのようなものだと考えられるか。次の中から最も適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 伊智花が平凡でつまらない答えを返してきたので、うまく伊智花の考えを引き出せなかったことを悔んでいる。

イ 伊智花の答えは求めていたものとは違っていたので、この先どのように取材を進めていくのがよいか迷っている。

ウ 伊智花が真剣に答えているようには見えなかったので、この調子では良い取材ができないと考えていらだっている。

エ 伊智花はいろいろなことに気をつけて答えているようなので、本心を語らせるにはどう切り出すべきか悩んでいる。

問五——線部5「そばにいたみかちゃんは手元のファイルに目線を落ととして、私のほうを見ようとしなかった」とあるが、なぜか。その理由として、最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 記者の質問に伊智花がいらついているのは分かったが、絵を描いたのは伊智花なので自分の思う通りに話すしかなく、余計な口をはさむまいと思ったから。

イ 被災地に向けたメッセージがほしただけの記者に対する伊智花の怒りを感じて、この絵を描くことを頼んだ自分にその怒りが向けられるのを恐れたから。

ウ 自分は伊智花の絵のすばらしさを評価しているので、記者がどういう質問をしようが、それを伊智花がどう受け止めようがどうでもいいと思っていたから。

エ 記者の質問に伊智花が傷つき、嫌な思いをしていることが分かり、それはこの絵を描かせた自分のせいだと思うと気まずくて目を合わせられなかったから。

問六 ——線部6「悔しいよりも、うれしいが来た」とあるが、この時の伊智花の気持ちはどのようなものか。次の中から最も適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 絵自体よりもタイトルのことばかり取り上げられたことに納得がいかず、やりきれない思いを抱えていたが、必死に取り組む姿勢を認めてくれるみかちゃんの優しさにふれて胸が熱くなっている。

イ 絵を描くことで被災地に届けようとしたメッセージが記者に伝わらず、描かなければよかったと不満に思っていたが、みかちゃんだけは絵の良さを正しく理解してくれたのでありがたく感じている。

ウ タイトルやメッセージのことばかり聞かれて絵自体をよく見てもみかちゃんに救われたような思っている。

エ ニセアカシアの絵を見た記者は感動しているように見えず、画力が足りないのだと情けなく感じたが、みかちゃんは伊智花の絵の力強さに元気をもらったと言ってくれたため自信を取り戻している。

問七 ——線部7「この心につかえる黒い霧」とあるが、この表現は伊智花のどのような気持ちを表しているか。次の中から最も適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 同級生や親戚が新聞記事のことでわざわざ連絡してくるわずらわしさに対するいらだち。

イ 伊智花の言葉など聞く耳をもたず、ただ自分の書きたいことを記事にした記者への不満。

ウ ニセアカシアの絵が「絆のメッセージ」としてしか評価されなかったことに対する怒り。

エ 被災者の気持ちなど分かりもしないのに、被災者を応援する絵を描いたことへの自己嫌悪。

問八 ——線部8「双葉が朝露を湛えて芽吹く絵だった」とあるが、「芽吹く」「双葉」を対象とするような絵を、伊智花は以前どのように思っていたか。七字で抜き出しなさい。

問九 ——線部9「これが最優秀賞。そんなの可笑しいだろうと思った」とあるが、伊智花がそう思ったのはなぜか。その理由として、最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア がれきに双葉というモチーフには震災からの復興というテーマがあまりに前面に出すぎていて、とってつけたようなわざとらしさが感じられ、かつ肝心な技術も劣っているように思えたから。

イ 復興をテーマにしているとはいえ実際にはがれきの下から双葉が芽吹くはずはなく、そんな非現実的な光景を技量もないのにあえて描いて人目をひこうとする姿勢に不快感を覚えたから。

ウ 震災からの復興というテーマをがれきの下に芽吹く双葉によって分かりやすく提示しているモチーフは良いが、それを描く技術がテーマの立派さに全く追いついていなかったから。

エ がれきに双葉のモチーフで復興への願いを強調したり、作画的に絵を下手に描いたりすることで、全体としてけなげな普通の高校生を演じて大人受けを狙っているような気がしたから。

問十 ——線部10「右足が自然に浮いて」問抜ける音がした」とあるが、この部分の表現の特徴とその効果に関する説明として、最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 小さな動きを繊細にとらえた足の動きの描写と、その音があることでかえって周囲の静けさが強調される靴音の描写とによって、静かな空間で伊智花の心が悲しみのために小さくしぼんでゆく様子が表現されている。

イ 伊智花自身も気づかないままずっと継続している不可解な足の動きの描写と、その不可解さを強調するような靴音の描写とによって、伊智花がずっと続けている行動が無自覚で不可解なものである様子が表現されている。

ウ しつかりと利き足から動かし始めた足の描写と、その動きが規則的に継続されていることが分かる靴音の描写とによって、伊智花が自分の滝の絵を蹴って破壊するためにじっくり準備運動をしている様子が表現されている。

エ 無意識に動き出した足の描写と、それにもなつてたんと鳴り続ける靴音の描写とによって、初めは伊智花自身も気づかなかつた怒りがしだいに自覚され、ゆっくりと確実に激しさを増していく様子が表現されている。

問十一——線部11「だから私の滝の絵は賞を獲れなかったことね」とあるが、この時、伊智花は自分の絵が受賞した絵より劣っていたからではなく、違う理由から賞を獲ることができなかったのだと理解した。伊智花は自分の絵が賞を獲れなかったのはなぜだと理解したか。「連想」という言葉を必ず用いながら六〇字以上、八〇字以内で答えなさい。

問十二——線部12「夕方の美術室にひとりきり、私は私の滝を抱きしめていた」とあるが、この時の「私」の気持ちはどのようなものか。次の中から最も適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 作画的で、写実的とはいえないくらいモチーフの絵が最優秀賞で、それより格段にリアリティのあるこの滝の絵が賞を獲れなかったことが悔しくてならないが、自分の描く絵の力を信じ、これからも描き続けていこうという気持ち。

イ 滝の絵が絵から離れたところでしか評価されないことに激しい怒りを感じたが、亡くなった祖母への思いを込め、高校三年間の集大成として全力を傾けて描いたこの絵のことをやはりいい絵だと思い、いとおしく思う気持ち。

ウ 賞を獲れなかっただけでなく、絵のことなどろくに分かりもしない紳に、この滝の絵の欠点を言い当てられたことに對する悔しさといきどおりを感じる一方で、懸命に描いたこの絵のことがかわいそうでならないという気持ち。

エ 賞を獲れなかった腹いせに自分の絵を蹴ろうとしてしまったが、祖母の好きだった不動の滝を描いたこの絵を蹴ったりなどしたら、亡くなった祖母がどんなに嘆き悲しむだろうと思ひ直し、祖母に對して申し訳ないという気持ち。

二、次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

1 駅前のカラオケ屋が閉業した。ネオンが消え、ウラ通りに面して打ち付けられていた看板が撤去されている。言うまでもなく、コロナ禍の影響だ。看板がなくなってしまうと、ガイカンは単なる小さなマンションである。看板に覆われていた部分が、風雨に晒されずのために生白い。

個人経営のお店で、高校生の頃、よくこのソファに横になって眠った。試験勉強をして、小説を書いた。当時シヨクしていた合唱部の歌を練習することもあった。

合唱部に入っていたとはいえ、歌は全くうまくない。歌うことが好きでたまらなかったかと言われれば、そうではないかもしれない。練習に出ない日も多く、部員にも顧問の先生にも数えきれないほど迷惑をかけた。けれども、響きのなかに立ち、歌の世界を感じる時間は本当に幸福だった。好きな曲は演奏会が終わっても聴き続けた。小説を書くときのお供にしている音源も多い。カラオケ屋で曲を入れることはなく、そういう、部活で出会った好きな曲を、伴奏もなのまま歌った。周囲の眼は一切気にならない、自分がいることで誰にも迷惑のかららない、希少な場所だった。

人と関わりたくなかったと言ってしまうと、なんだか人嫌いのように聞こえるが、そうではない。人を苦手になるよりさきに、自分をよく思っていないなかったので、一人でいなくてはならない、人に近づいてはいけなさと感じるが多かった。

2 そう考えるようになった理由のひとつに「におい」があった。「自分が異臭を発しているのではないか」という不安。一時期、この不安が頭から離れなくなったことがある。ふとした瞬間に、自分がおうのだ。入浴直後であっても、頭皮を触ると指がにおう。歯を磨いても、ものを食べるとすぐ口臭がしているのではないかと気になり、食事中水を何度も口に含み、ひそかにゆすぐ。その時期は、自分が汚物であるとの認識がかなり強くあった。それが、自分への人格否定や容姿コンプレックスとあいまった精神的なものであったのか、部屋が荒れ放題で食生活も偏っていたために、実際にひどい体臭を放っていたのか、定かでない。鼻はかなり利くが、自分の体臭は自分では気づけないというし、友人に「私、くさいかな」と聞くわけにもいかないので、不安は増すばかりだった。人と話していても「臭いと思われているかもしれない」「いまは普通に話してくれているけれど、不快にさせて、我慢させているのかもしれない」との考えがよぎってしまう。教室でひと

りになる瞬間があると「にょいのせいでは」と思う。話すのも気が重く、人と距離をとらないと安心できなかった。

この「自分がおうのではないか」という不安は、この原稿を書き始めるまで誰にも打ち明けたことはなかった。それくらい、においやセイケツ感にまつわる問題は繊細なものだ。いじめで「菌」「くさい」「きもい」といった言葉がたびたび用いられるのも、そのせいだろう。これらの言葉の非常に悪質なところは、相手を貶めるにとどまらず、「お前は他者を不快にさせる存在だ」と相手に刷り込むところだ。呼吸を阻むものから、人は距離を取る。攻撃するのでなければ、それ自体は当然の権利としてある。誰もがそれをわかっているからこそ、自分自身が「臭い」「きたない」と理不尽に思わされてしまうと、人と離れている状態を常に受け入れるほかなくなってしまう。文字通り、居場所をなくしてしまうのである。

現在、人と物理的に距離をとることが求められる。ソーシャルディスタンスとは、コロナウイルスの感染拡大防止のために叫ばれるようになった、人と人との距離を確保しようとする動きのことだ。しかし、単に人と遠ざかるのではなく、接触なしに距離を近づけるのが、ソーシャルディスタンスの時代の特徴である。

感染拡大に伴い、現実での接触を避けるために推奨されるようになったのが、遠隔でのやりとりだ。ビデオ通話を用いて、会議や授業を行う。2019年に小説家としてデビューしてから、大学の授業を受けつつ小説を書く生活をしているが、今年度に入ってから授業も取材も遠隔で行われることが増えた。SNSやZOOMといった直接的でないやりとりの特徴は、接触を伴わず人と近づけることだ。万が一自分が感染者でも、相手にうつす心配はない。その場にいた誰かからうつされる心配もない。

現実的な接触がないということは、「にょい」が漏れ出ないということだ。この場合の「にょい」は、自分の弱点、相手に働きかけたくない点、と言い換えてもいい。遠隔でのやりとりは、それを相手に嗅ぎ取られる心配なく関わることを可能にする。

私自身、遠隔でのやりとりに助けられている面もある。多くの人と直接顔を合わせる機会が減り、毎朝満員電車で自分の弱点を晒し続けることから逃れられる。現在、大学生以外は多くの生徒が通学しているようだが、小学生から高校生の遠隔授業は悪いことばかりではないように思う。遠隔での授業は、教室での忍び笑いや目配せを不可能にする。通学できない生

徒に、欠席以外の選択肢を与えることができる。現在は、遠隔での教育体制が追い付いていないのもあって難しいかもしれないが、そういった選択肢が増えることで今よりも少し息がしやすくなる子もいるはずだ。

当然、この遠隔での関わり合いでは抜け落ちてしまうものもあるだろう。「にょい」をはじめとした、自分でコントロールできない情報は、遠隔では共有されづらい。良くも悪くも、見たくないものは見ることなく、見せたくないものは引つ込めたままになる。物事に対するとっさの反応、醸し出す雰囲気、相槌などは、言葉よりもずっと正確にその人を映し出すこともあるが、遠隔ではそれらがなかなか見えてこない。

現実世界で接触すること、一緒にいることは、人の体臭を嗅ぎ続けることだ。不満や諍いが生まれることもある。たとえば、妻が夫に向かって、「あんた、靴、くさいわよ」と鼻をつまみ、からかつてみせる。「おれは働いて帰ってきてるんだぞ。一発目に言うことがそれか」と夫が腹を立てる。そのまま喧嘩に発展、なんていう光景はさして珍しくもないだろう。コロナ禍は、人と人との距離を分断した一方で、同じ家に住む者同士の距離を強制的に手詰めることとなった。四六時中、狭い場所で一緒に過ごすことで、心を舐められる人も多い。けれど「にょい」を嗅ぎ続け、互いにそれを受け入れあうことの安心感というののもまた存在するはずである。「にょい」を含んだ繋がり**の強さ、確かさは、やはりある。**

「にょい」のある現実で人と接触すること、誰からも距離をとること、「にょい」のない世界で誰かと関わりを持つこと。私はどれも良い悪いと切り分けることはできない。本来ならば、その人が自分で選んでいけばいいだけのことだ。しかし、その選択ができなくなってしまった。これまでは、一人になりたかったら、高校生の頃の私のようにカラオケ屋に駆け込めばよかった。ひとりだけで電車に乗り、旅に出ることもできた。逆に人恋しいと思えば、誰かと会うこともできた。いま、選択肢が失われつつある。だからこそ昨今の状況は苦しいのだと思う。

(朝日新聞二〇二一年一月九日付朝刊 宇佐見りんの寄稿による)

問一 線部 a ~ e のカタカナを漢字に直しなさい。

問二——線部1「駅前のカラオケ屋が閉業した」とあるが、この「カラオケ屋」は筆者にとってどのような場所だったか。そのことが端的に述べられている一文を探し、最初の五字を抜き出しなさい。

問三——線部2「そう考えるようになった理由のひとつに『におい』があった」とあるが、「におい」という語にかきかっつけられているのは、この言葉に「鼻で感じられる異臭」以外の意味も持たせようとする意図があったからだと考えられる。それはどのような意味か。次の中から最も適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア それ自体必ずしも悪いものとは思っていないが、できれば隠したい自分の特徴。

イ いつも注意深く隠して人には決して明かさないうまにしている自分の密かな弱点。

ウ いくらかき消そうとしても、すぐ心にわきあがってきてしまう自分の不安な気持ち。

エ 自分の意志では隠しきれないが、できれば人には晒したくない自分の嫌な部分。

問四——線部3「この不安が頭から離れなくなった」とあるが、「自分が異臭を発しているのではないか」という不安」

が「頭から離れなくなった」のはなぜか。その理由として、最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 自分の異臭の元が何であるかが分からないために、異臭を消すにはどうしたらよいかまったく分からなかったから。

イ 教室で一人になる機会がだんだん増えてきたことで、それが自分が異臭を発しているという確信につながったから。

ウ 自分が実際に異臭を発しているのか、気のせいなのか確かめる方法がなく、不安を解消することができなかったから。

エ 異臭への不安が、自分の人格否定や容姿コンプレックスから発した精神的なもので、容易に解消できなかったから。

問五——線部4「それ」とはどういうことを指しているか。次の中から最も適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 嫌なにおいを出す人や物を遠くに追いやる権利は当然誰にでもあるということ。

イ においを理由に相手から遠ざかる行為を責めることはできないということ。

ウ 自分はおいておくと刷り込まれるつらさは人に分かってもらえないということ。

エ においの問題は繊細なので自分の発するにおいには注意すべきだということ。

問六——線部5「遠隔でのやりとり」の特徴を説明したものととして、最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 直接顔を合わせることなくやりとりができ、自分の弱点を隠しておくことができるが、自分が無意識のうちに発する、言葉よりも多くのことを伝えるような情報の共有は難しい。

イ 相手と接触することはないので感染の心配はなく、自分の弱い部分を晒し続けることから逃れられるが、自分が伝えたいと願う情報を相手に正確に届けることはできない。

ウ 他人との直接的な接触を避けることができ、感染の心配から逃れることができるが、においをはじめとした、自分でコントロールできない情報を隠しておくことは難しい。

エ 直接のやりとりよりも人と近づくことができ、他人に見せたくないものを見せないままでいられるが、自分が制御することのできないような情報を相手に伝えることはできない。

問七 — 線部6「今よりも少し息がしやすくなるはずだ」とあるが、「息がしやすくなる」とはどういうことか。次の中から最も適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 人が限られた空間の中に密集する教室や電車などでは呼吸が苦しくなってしまう子が、快適な空間で身体に負担を覚えることなく勉強できるということ。

イ 教室や電車内で自分や他人の体臭が気になって登校できない子が、嫌な体臭を気にしなくてもいい環境かんきょうで授業を受けることができるようになるということ。

ウ 人との直接的なやりとりや通学に不安を覚える子が、登校しなくても別の形で生徒の一員として学習を続けることができるようになるということ。

エ 人と顔を合わせることが苦痛で登校できない子が、遠隔授業を使って人と顔を合わせることに慣れていくことで学校に通いやすくなるということ。

問八 — 線部7「この遠隔での関わり合いでは抜け落ちてしまうものもあるだろう」とあるが、「抜け落ちてしまう」とでどうなってしまうのか。次の中から最も適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 相手の視線がどこをとらえているのかがつかみづらく、相手が自分のことをどう見ているのか分からなくて不安になってしまう。

イ 相手の言葉は伝わっても、話している雰囲気までは伝わらないので、その言葉に込められた相手の真意が分かりにくくなってしまふ。

ウ 見たくないものは見ないですみ、見せたくないものは隠すことができるので、おたがいに相手のいいところばかりを見てしまふ。

エ 相手を理解するために重要なその人の雰囲気などは、一緒にいなければ感じとれないので、おたがいの理解が浅くなってしまふ。

問九 — 線部8「『におい』を含んだ繋がり」とあるが、どのようなものか。次の中から最も適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 同じ家で暮らす者同士の距離が近づいた結果生まれた、心を蝕まれることさえある関係。

イ 現実の世界で接触し顔を合わせ、相手の弱点を受け入れあうことで作り上げられる関係。

ウ 相手のにおいを嗅ぐことで不安が消え、安心感を得られるくらい強く結ばれている関係。

エ 遠隔のやりとりからは生まれえないような、狭い場所で共に過ごすからこそ築かれる関係。

問十 この文章を読み終えた三人の生徒が話をしている。

に入る適切な内容を本文中から二五字以内で抜き出さなさい。また

に入る適切な内容を、「コロナ禍」「距離」という言葉を必ず用いながら六〇字以上、八〇字以内で答えなさい。

A 筆者は、新型コロナウイルスの感染を防ぐことができるし、自分の「におい」を嗅がれる心配もないから、遠隔でやりとりする方が良いと考えているんだね。

B そうかなあ。遠隔だと「抜け落ちてしまうものもある」とはつきり言っているから、直接顔を合わせてやりとりする方が良いと考えているんじゃないかな。

C いや。「

」とあるから、どっちが良いって言っているわけじゃないんだよ。

A ……あつ、そう書いてあるね。

C うん。この文章で筆者は、

ことが問題だと言っているんだよ。

B なるほど。

A そうか。たしかにそうだね。

二〇二二年度 一般入試① 国語解答用紙(2)

受験番号

--

氏名

--

	①
	②
	③
	④
	⑤
	⑥
	⑦
	⑧

◆右のらんには何も書かないこと。

小計

--

二

問 一	
d	a
e	b
	c

問二

--

問三

--

問四

--

問五

--

問六

--

問七

--

問八

--

問九

--

問 十				
2			1	